

一人称複数なんてありえない

外国語の文法を習っていると、ときどき不思議な用語に出くわすことがある。フランス語では「半過去」あたりが代表的だろう。文字通りの意味に取れば「半分だけ過去」なのだが、これでは何のことやらわからない。代名動詞 *se manger* の活用も変だ。*je me mange / tu te manges* と活用させると、これではまるで我が身を食らう蛸である。ふつう *se manger* をこんな風を使うことはないのだから、明らかに文法の教室でのみ成立するフィクションだ。

同じことが「一人称複数」についても言える。私たちは教室で何も考えずに「一人称複数」などと言っているが、そんなことはありえないのである。だってそうでしょう。一人称とは話し手を表わすのですよ。話し手が複数いるのは、昔懐かしいシュプレヒコールのようなごく限られた場合だけだ。小学校の卒業式で、(代表が)「私たちは」、(全員で)「私たちは」、(代表が)「卒業します」、(全員で)「卒業します」と、声を揃えて大声で叫ぶあれである。シュプレヒコールなどと言うと、60年代終りから70年代初めにかけての大学紛争を思い出して、年がばれてしまうが、小学校の卒業式では今でも行なわれているのだろうか。

nous は正しくは「一人称複数」ではなく、「一人称の j プラス誰か」なのである。この点が二人称複数の *vous* とちがうところだ。*vous* は額面どおり「複数の聞き手」だからこの呼び名は正しい。私たちは複数の聞き手に向かって話すことはよくあるが、複数の話し手が同時に話すというのは、ふつうはありえない。だから「一人称複数」という言い方は、「一人称の j プラス誰か」を意味する便宜的な呼び名だと理解しなくてはいけない。

問題はこの「プラス誰か」である。これによって *nous* の意味が変わってくる。*nous* の意味に含まれた「一人称 = 話し手」は一定不変なのだが、おまけの「プラス誰か」によって意味が変わるのだ。世界中の言語のなかには、「プラス誰か」をふたつのケースに分けている言語がたくさんある。「プラス誰か」が聞き手を含む場合と、含まない場合である。つまり *nous* { *je+ tu/vo* } と、*nous* { *je+ eux* } である。フランス語ではこのふたつのケースを区別しない、と思うでしょう。ところがちゃんと区別があるのだ。それは次のような使い方である。

(1) Partez les premiers, nous rattraperons en chemin.

「先に出かけて下さい。私たちは後で追いつきますから」

nous ではなく *vous* と対比され、「聞き手を含まない *nous*」を表わす。日本語なら「私ども」とか、やや古くさいが「手前ども」が聞き手を含まない場合に当たる。日本語だって区別できるのだ。このように「一人称複数」では、「話し手の *je*」は一定不変の要素だが、*je* と何を組み合わせるかで意味が変わってくるのである。「隠れた要素」が意味を左右するというよい例だ。

nous の意味は伸縮自在

ここまでは話の枕で、本題はここからである。この連載の第一回では「iは彼ではない」という話をした。それにならって言うと、「nousは私たちではない」のである。「そんなバカな」と憤慨して本誌を投げ出さないでいただきたい。ここでもまた隠れた要素が nousの意味を決めているのだ。

nousの意味が伸縮自在であることは、次のような例を見ればすぐわかる。nousの意味が最大範囲に広がるのは、次のような普遍的真理を述べる文においてである。

(2) Quelquefois nous effraie [真実とは時に恐ろしいものである]

もちろん「真実は時に私たちに怖がらせる」と訳してもまちがいでなく、教室での訳読ならば合格点をもらえるだろう。しかし私の愛読書『翻訳仏文法』の著者の鷺見洋一先生も書いておられるように、人称代名詞はなるべく訳文からは省いてしまうのが翻訳のコツとされているのだから、nousは特に訳す必要はない。また、この nousは orの目的格とも見られるので、日本語では訳さない方が自然である。しかしながら、この nousは今この世界に生きているすべての人のみならず、過去に生きた人や未来に生まれて来る人までをも含めた最大範囲をさすことは意識すべきである。

(3) Nous sommes {mardi / en} 今日火曜日です 今夏です

曜日・日付・季節などの表現の nousは訳すことはできないが、過去や未来の人は含まないので、一般的真理を述べる上の文よりは範囲が狭い。また理屈を言えば、日付変更線の向こうのアメリカにいる人は含まないし、季節が反対の南半球の人は含まないことになる。私から余り離れた人は含むことができないのだが、私たちはこの nousの伸縮自在性をごく自然に理解している。

次のような例も要注意だ。所有格 nousになっているが同じことである。

(4) Paul Morand est un des observateurs les plus piquants de

「ポール・モランはわれわれの時代の最も鋭い批評家の一人である」と訳したら失格退場である。この nousは「時代を共有している人たち」をさしているので、「現代の最も鋭い批評家の一人である」と訳さなくてはならない。

次もよく似たケースである。

(5) Les anciens distinguaient les phénomènes qui semblaient obéir à ceux qu'ils attribuaient au hasard. Dans cette conception, le mot le plus objectif : ce qui était hasard pour l'un, était aussi hasard pour l'autre. Mais cette conception nous sommes devenus des déterministes à l'égard de
「古代の人は規則的法則に従う現象と偶然による現象を区別していた。この考え方では偶然という言葉は明確で客観的の意味を持っていた。ある人にとって偶然である

ことは、別の人にとっても、神々にとっても偶然なのである。しかしこの考え方はもはや私たちのものではない。私たちは絶対的決定論者になってしまった」

ここでも古代の人との対比があるのだから、「私たち現代人」または、単純に「現代人」とすべきである。ここでは、*nous*と対立している *vous* / が何かが決め手になる。

さて、上級コースに移ろう。文脈から *nou*がどの範囲をさしているかを読みとらなくてはならないケースである。

(6) La littérature française est une littérature adulte. Les qualités prises le plus sont celles que l'on n'acquiert ~~nous ce que parvenue tout~~ c'est la violence de l'émotion. ~~Essai sur l'utilisation de la littérature~~ の文章を France 部改変)

「フランス文学は大人の文学である。フランス文明が最も重んじるのは、熟年にならないと身につけることができないような性質である。一方、われわれのところで一番大事なものは感情の激しさなのだ」

著者の Curtiusがドイツ人で、この文章はフランスとドイツを比較しているという文脈に注目しなくてはならない。この *nou*はフランス人との対比でドイツ人をさしているのだから、「われわれドイツ人において一番大事なものは感情の激しさなのだ」と訳さなくてはならない。もちろん「われわれ」を省略して「ドイツ人」としてもよいのだが、それだと著者 Curtiusの同胞への共感が失われる。

意味は隠されたものによって決まる

さて、今まで見てきた *nou*の伸縮自在性から私たちは何を学ぶべきだろうか。ひとつはフランス語を日本語に翻訳する場合の注意である。鷲見洋一先生の『翻訳仏文法』を一例としてあげたが、ふつう翻訳に際しては人称代名詞は訳さず省くほうがよいとされている。一般論としては確かにそうなのだが、上に見た例はそれとは逆の場合もあることを示している。文脈によっては *nou*を「われわれドイツ人」と訳さなくてはならないということは、人称代名詞の意味を形作っている「隠された要素」を訳出しなくてはいけないということである。始めに述べたように、*nous*は「jeプラス誰か」なのだが、*nous*の意味は *je*ではなく、隠れている「プラス誰か」によって決まるからである。

ここには人称代名詞 *nous*の意味解釈を越えて、もっとコトバの仕組み全体に関わる問題が潜んでいる。それは、「意味は隠されたものによって決まる」ということである。名詞や動詞についてもこのことは成り立つのだが、これが決定的に重要なのは、フランス語で重要な役割を演じている冠詞の解釈においてである。Tu n'as pas vu le chien「犬を見かけなかったかい」という文で、定冠詞 *le*は「唯一性」を表わすと言われることがある。ここで「唯一性」というのは、「ある特定の頭の犬をさす」というほどの意味である。このような説明はまちがいでないのだが、大事なことは「ある範囲において」唯一的だという点であり、この但し書きが忘れられてしまうことが多い。もしこの但し書きがないと、*le soleil*や*la lune*などの例

と同じように、この世界には犬が一頭しかいないということになってしまう。私たちは、Tu n'as pas de chienと言ったとき、なかば無意識のうちに le chienが唯一的である領域を、例えば「我が家」のように狭めているのである。このような「領域の限定」があるということが定冠詞の最も重要な性質なのであり、この点において領域の限定のない不定冠詞 Tu n'as pas de chienと対立するのである。しかしこれはまた別のお話である。（とうごう・ゆうじ）